

言と貴重な資料を拝読するにつけ、この一連の情報は是非ともまとめておくことが大事なことだと意を強くした次第です。

願わくば、当時の女学校で学ばれた方々に思い出話をお聴かせいただき、内容を充実したいと思えます。

人口減少時代に突入し、学校も統廃合は避けられませんが、井戸を掘られた先学の思いを引き継いで、あらためて中江藤樹先生とともに歩みたいと願います。

### 藤樹高等女学校の沿革

昭和二年

大溝町立大溝実科高等女学校

昭和十一年

滋賀県立藤樹実科女学校

昭和十五年

滋賀県立藤樹高等女学校（改称）

昭和二十三年

学制改革により滋賀県立今津中学校と

滋賀県立藤樹高等女学校を統合し、滋

賀県立高島高等学校として開設

昭和二十四年

旧藤樹高等女学校校舎を廃止し、今津

校舎に統合。旧校舎は高島町立高島中

学校として使用される。（なお、文章

内での表現は最終名であります滋賀県

立藤樹高等女学校といたしました。）

### 参考文献

・「混沌」第十五巻第四号

（昭和十一年四月発行）

・「混沌」第十五巻第七号

（昭和十一年七月発行）  
・「藤樹研究」第六巻第一号  
（昭和十三年十二月発行）  
・「道心に訴える」

（昭和二十八年八月発行）

・松本義懿著「町報たかしま」

（昭和四十六年八月発行）

・ウイキペディア

（一）高島高等学校

（二）高瀬武次郎

（三）上原 茂次

・京都新聞

（平成十一年十月十九日）

「岩石と語らう一八七」

・滋賀大学広報（平成十八年七月発行）

「草の根に生きた近江の教師―松本

義懿と藤樹教学伝道の生涯」

・広報たかしま歴史散歩四十三

（平成二十年七月発行）

・中江藤樹記念館資料シートNo・4

・藤樹神社創立十周年記念碑

・滋賀県立藤樹実科高等女学校

教育方針（松本義懿著）

「ヒマラヤ杉」については紙幅の関

係で割愛し、許されれば後述したく

存じます。

## 「藤樹紙芝居」の紹介⑤

### 『追いはぎと先生』

（解説）

この話は、先生が大洲から生まれ故郷の小川村に帰り、次第に学問が深まっていったころの話です。

藤樹先生は門人だけでなく、夜、書院（学問所）に集まる村人に話をし、近隣の村々から請われると



出講釈をするなど、誰にでもよく分かるように工夫して、熱心に良知の話を説きました。そんなある晩、安曇川に

近い村で話を終えて、近道である川に沿った、竹やぶの続く「馬通し」を通って帰ることにしました。当時、この地域では「追いはぎが出る」という噂があったので、先生は護身用に大小の刀を身に付けて、外出していました。

うっそうとした暗い竹やぶの間から追いはぎが出てきました。手持ちのわずかな金を与えようとすると、満足せず刀を抜いてかかろうとしてきました。「戦うなら名を名乗るのが、武士のしきたり」と言つて、先生がまず名乗ると、追いはぎたちは、『中江与右衛門』という名前を聞き、驚きました。とんでもない無礼を働いたと、土下座をしてみえました。当時、誰にでも親切で高徳な学者先生であり、人々から『聖人』と慕われていた中江藤樹先生に刃を向けたからでした。そこ

で、反省の気持ちをおくみ取った先生は、追いはぎたちと円座になって腰を下ろしました。

「人はだれでも、時々心が曇ることがあるが、自分の過ちに気づいて心を磨き直して精進すれば、だれでも聖人になれる」と、教えました。

この晩を境に、追いはぎたちは心を入れ替え、先生の教えを聞きに書院に行き、それを糧にして真面目に働いたと伝えられています。

この話は口碑伝説として伝えられました。先生は自分に刃を向けた賊に対しても、憎しみをもちず温かい心で話を聞き、論じて更生させました。先生の人間味がしみじみと感じられる話です。暗闇の中で話が展開しますが、終わりには、心の中に明るい光が差し込むような温かさを味わってもらえるかと思えます。

先生が、賊たちに身をもつて伝えた「明德（良知）の教え」を感じ取ってほしいと考え、紙芝居を構成・制作しました。絵を見せながら、「視聴者の年齢に合う語り方」で話を展開しますと、幼児から大人まで楽しむことができる内容かと思えます。

（紙芝居）

①ある晩、藤樹先生は、一里ほど（約4km）離れた村へ出かけて、勉強会をしました。たくさんの村